

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第5号 畑作物

発行日 平成21年 7月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

大豆：生育の早いところから開花が始まっています。ほ場をよく観察し、今後の病害虫の防除予定を組みましょう。また、ウコンノメイガの飛来しているほ場がみられます。多発の徴候が見られる場合は薬剤防除を行いましょう。

小麦：今秋、小麦の播種を予定している水稻の圃場では、適期播種が実施できるよう、水稻出穂以降の水管理をきめ細やかにを行い、収穫に備えましょう。連作圃場では排水路などの点検・補修や土壌改良を行っておきましょう。

1 大豆

(1) 雑草対策

大豆の生育期に使用できる薬剤は、全面散布できる茎葉処理剤と吊り下げノズルを使用して散布する畦間処理剤、畦間・株間処理剤があります。雑草の種類や大きさを確認して効果的に使用しましょう。

表1 大豆生育期に使用できる代表的な薬剤と使用方法

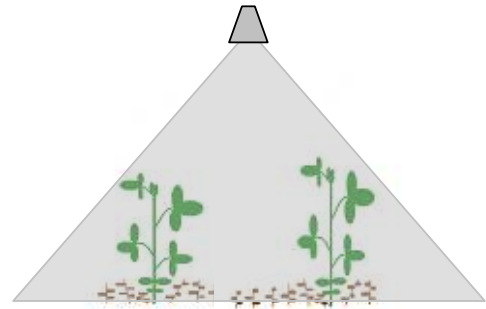
薬剤名	対象雑草	使用時期	使用方法	使用量・希釈倍数	使用回数	備考
ワンサイドP乳剤	一年生イネ科	イネ科雑草3～5葉期 収穫60日前まで	雑草茎葉散布	75～100ml 希釈水量70～100ℓ	1回	スズメノカタビラを除く
ポルトフロアブル	一年生イネ科	イネ科雑草3～10葉期 収穫30日前まで	雑草茎葉散布	200～300ml 希釈水量100ℓ	1回	スズメノカタビラを除く
ナブ乳剤	一年生イネ科	イネ科雑草3～5葉期 収穫60日前まで	雑草茎葉散布	150～200ml 希釈水量100～150ℓ	1回	スズメノカタビラを除く
セレクト乳剤	一年生イネ科	イネ科雑草3～5葉期 収穫50日前まで	雑草茎葉散布	35～50ml 希釈水量100ℓ	1回	スズメノカタビラを除く
	スズメノカタビラ	イネ科雑草3～5葉期 収穫50日前まで	雑草茎葉散布	50～75ml 希釈水量100ℓ	1回	効果の発現が遅い
大豆バサグラン液剤	畑地一年生雑草(イネ科を除く)	大豆の2葉期～開花前(雑草生育初期～6葉期まで) 但し収穫45日前まで	雑草茎葉散布	100～150ml 希釈水量100ℓ	1回	品種によっては薬害により減収するおそれがある アカザ科、ヒユ科、トウダイグサ科には効果がる
ロックス(水和剤)	一年生雑草	本葉3葉期以降雑草生育期(雑草草丈15cm以下)	畦間・株間処理 雑草茎葉兼土壌散布	100～200g 希釈水量70～150ℓ	1回 (リニオンを含む農薬の総使用回数2回以内)	選択性がないので本葉に飛散させないように注意 イネ科雑草には効果がない
ラウンドアップマックスロード	一年生雑草	収穫前日まで	畦間処理 雑草茎葉散布	200～500ml 希釈水量通常散布50～100ℓ 少量散布25～50ℓ	1回 (グリホサートを含む農薬の総使用回数2回以内)	選択性がないので作物に飛散させないように注意
バスタ液剤	一年生雑草	収穫28日前まで	畦間処理 雑草茎葉散布	300～500ml 希釈水量100～150ℓ	3回以内 (グリホサートを含む農薬の総使用回数3回以内)	選択性がないので作物に飛散させないように注意
ハービー液剤	一年生雑草	雑草草丈20cm以下 収穫7日前まで	畦間処理 雑草茎葉散布	300～500ml 希釈水量100～150ℓ	2回以内 (ピアラホを含む農薬の総使用回数2回以内)	選択性がないので作物に飛散させないように注意

《大豆生育期の広葉雑草を対象とした散布方法の注意点及び除草剤の特徴》

1 全面散布

大豆バサグラン液剤

- (1) 選択性除草剤であり、作物の上から散布できる。
- (2) 散布器具として既存の器具が使用可能である。
- (3) イネ科雑草には効果がない。
- (4) シロザ・ツユクサ・イヌビユ・エノキグサ等に対する効果が不安定である。
- (5) 散布後に発生する雑草に対して効果がない。
- (6) 薬害を生じさせやすい薬剤なので、使用にあたっては指導機関の指導を受け、十分に効果・薬害を理解して使用すること。

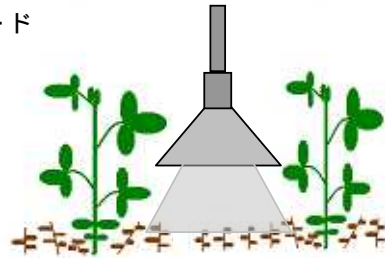


全面散布のイメージ図

2 畦間処理

バスタ液剤、ハービー液剤、ラウンドアップマックスロード

- (1) 非選択性除草剤であり、作物に飛散させないように十分に注意する。
- (2) 株間には絶対に散布しない。
- (3) 散布器具として吊り下げの専用ノズルが必要であり、飛散防止用カバーを用いて散布することが望ましい。
- (4) 大豆バサグラン液剤では効果の低い草種が優占するほ場でも効果が高い。
- (5) 散布後に発生する雑草に対して効果がない。

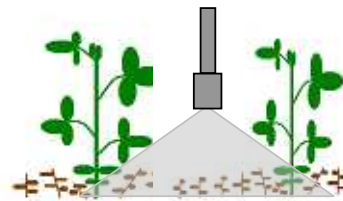


畦間処理のイメージ図

3 畦間・株間処理

ロックス（水和剤）

- (1) 非選択性除草剤であり、本葉に飛散させないように十分に注意する。
- (2) 散布器具として吊り下げの専用ノズルが必要である。
- (3) 畦間及び株間の雑草に対して効果が期待できる。
- (4) イネ科雑草には効果がない。
- (5) シロザ等に対する効果が不安定である。
- (6) 雑草茎葉兼土壌処理であることから散布後に発生する雑草に対して抑制効果が見込まれる。



畦間・株間処理のイメージ図

(2) 病虫害防除

ア ウコンノメイガ

「ウコンノメイガ」の成虫が飛来しているほ場がみられます。この成虫は葉の裏に産卵し、かえった幼虫が葉を巻いて食害します。ほ場をよく観察し、多発の徴候がみられたら、すぐに防除を行いましょう。「リュウホウ」や「黒千石」など葉色の濃い品種や生育が旺盛な圃場で多発する傾向があります。重点的に観察しましょう。

防除の目安

7月末～8月初めに、一株あたりの葉巻が6個以上見られる場合、すぐに防除します。

ウコンノメイガに効果のある薬剤

薬剤名	10aあたり使用量	使用時期	使用回数
サイアノックス粉剤	4 kg	収穫7日前まで	2回以内
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで	2回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫21日前まで	4回以内



若齢幼虫による食害（葉巻）



「ウコンノメイガ」成虫



「ウコンノメイガ」幼虫



被害の状況

イ マメシクイガの防除

8～9月に羽化した成虫が粒の肥大が始まった大豆の莢に1粒ずつ産卵し、ふ化した幼虫が子実を食害して、収量・品質を低下させます。産卵盛期から幼虫ふ化期に薬剤による防除を行いましょう。

マメシクイガは、連作で密度が高まり被害が多くなる傾向があります。なおマメシクイガと紫斑病は同時防除が可能です。

防除適期（産卵最盛期）

県中北部：8月第6半旬、 県南平坦部：9月第1半旬

ただし、ピレスロイド系薬剤（トレボン乳剤、アディオン乳剤等）を使用する場合は、上記より1半旬早め（県中北部：8月第5半旬、県南平坦部：8月第6半旬）に散布する。

使用上の注意点

マメシクイガの防除にカルホスを含む薬剤は使用しないこと。



マメシクイガの幼虫

ウ 紫斑病の防除

8月下旬以降で気温が20℃付近にあり、降雨が続いた場合に感染します。若莢期～子実肥大期に薬剤による防除を行いましょう。なおマメシクイガと紫斑病は同時防除が可能です。

防除適期

1回防除の場合：開花期から30日後頃

2回防除の場合：開花期から25日、35日後頃（散布間隔は10日程度）

使用上の注意点

- ・2回散布の場合、耐性菌の発生を防ぐため、1回目に用いる薬剤と2回目に用いる薬剤は同一薬剤や同系薬剤を避ける。
- ・アミスター20フロアブル（ストロビルリン系薬剤）は、耐性菌の発生リスクが高いため、2～3年に1回の使用にとどめること。
- ・マネージ剤、サンリット水和剤は同系（DMI剤）薬剤なので連用しない。
- ・紫斑病の防除にトップジンM水和剤、トップジンM粉剤、スミトップM粉剤、トップジンMゾルは使用しない。



紫斑粒



被害株

2 小麦

(1) 小麦栽培を意識した水稲管理

水稲を収穫した後に小麦の播種を行う場合には、小麦の栽培を意識した水稲の管理が必要です。水稲の収穫が遅れれば、排水対策や小麦の播種も遅れてしまいます。

小麦作付予定の水稲の管理

- ・水稲の出穂開花期は大量に水を必要とするので、田面が露出しないよう湛水管理（浅水でOK）とする。
- ・開花後の水管理は田面が湿っている程度とし、湛水状態にする必要はない。
- ・水稲は適期収穫を行い、収穫後はすぐに溝掘り（額縁明渠）等排水対策を実施する。

(2) 連作圃場での排水対策

連作圃場では排水路などの点検・補修や土づくりを行って適期は種に向け対策を万全にしておきましょう。また、明渠が排水口へつながっているか確認しましょう。

(3) 土壌改良

収量アップ、品質向上のために土づくりは必須です。特に連作圃場ではここ数年地力の低下が目立っています。他の作目を取り入れて、良い輪作サイクルができれば申し分ないのですが、できない場合は堆肥投入や緑肥を利用し積極的に土づくりを行う必要があります。

また、石灰・苦土が減少し、酸性化が進んでいるほ場も目立ちます。毎作、土壌改良資材を施用できなくても、水田作での堆肥の秋施用や粗砕炭カルの一回施用など、数年間のローテーションの中で、土壌改良に取り組みましょう。

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

6月1日～8月31日は
農薬危被害防止運動期間です

近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
農薬の保管・管理は適切にしましょう